

発行：弘大病院広報委員会
(委員長：水沼英樹病院長補佐)

弘前大学医学部附属病院広報誌

〒036-8563 弘前市本町53
TEL：0172-33-5111(代表) FAX：0172-39-5189
http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/hospital/

なんとう

南塘だより

※南塘とは、弘前市史によると医学部敷地内にあった南瀬池のことをいう。

第39号

(創刊：1994年12月15日)

「チーム医療での良好なコミュニケーションを」

弘前大学医学部
附属病院長 棟方 昭博



附属病院の目標の一つとして、良質な医療を提供するために、安全管理とコミュニケーションのとれたチーム医療が挙げられています。毎月のリスクマネジメント対策委員会は、100件以上のインシデント報告が挙げられてきます。多くのケアレスミスとともに、コミュニケーション不足によるインシデント報告もあります。チームを組んでいる医療人同志の情報の共有により、

少しでもリスクを減らしたいものがあります。医療安全対策レターやインフォメーションコントロールニュースが各委員の努力により発行されており、これらの繰り返しの確認とともに、お互いの仕事にも注意を配ってほしいものです。

一方、高度医療を提供する際の患者側へのインフォームドコンセントの重要性が強調されていますが、型の如きでないコミュニケーションが必要であります。医療を受ける患者側の医療に対する理解度は千差万別であり、また、医療の多様性から相手の理解度を確認しながら話を進めることが重要であります。特に急性疾患では、医療人と患者側との信頼性が確立する前に疾病が予期せぬ以上に進展することもあり、病態の変化に応じた度重なる説明を必要とすることも銘記してほしいと思えます。

最近「筋論クレマー」の増加とその対策について知ったので紹介します。「筋論」クレマーとは：「それはおかしいのではないか？」という視点から疑問、質問、意義を病院、診療所に申し立てる家族を含めた患者さんのことを指しております。最初の対応での「誠意の欠如」が発端になり、筋の通った問題提起や疑問を突きつけてくるのが筋論クレマーの特徴であります。初期対応で誤らないためのカギは、迅速なコミュニケーションであり、「3つの心得」が求められます。1.相手の言い分を十分に聞き、途中で話を遮らないことー「聞く姿勢」が「誠意」を伝えるー 2.筋論のクレマーかな…？と思ったら「面談せよ」ー「面談」は最大の「誠意の表明」になるー、「あの時会っておけばよかった」と悔いを残すなー 3.対応は「迅速」に行え。同じ対応をしても遅いと評価されません。

先憂後楽

最近思ったこと



広報委員会委員
(神経科精神科) 武田 哲

数年前のことですが、ある山奥のこぢんまりとした総合病院に勤務する機会がありました。「昔話にでてきそうな、のどかな農村の風景」と言いたいところですが、実際には休日に辺りを散歩していても、子どもの姿を見かけることはあまりなく、日本の過疎・高齢化の最先端を突き進んでいるような地域でした。その地域では、高齢者を支える世代が既に「高齢」に手が届きそうな年齢になっており、更に次の世代は都会に出てしまっているという状況の家族が少なくありません。

病院を受診されるのも圧倒的に高齢の方が多く、そんな患者さん達が、「家族の足手まといになってしまう」、「若い人に申し訳ない」と口にされるのを何度か耳にすることがありました。財政上の問題や医師不足から地域の診療所が廃止され、この病院も統廃合の話題に上る中、治療を必要とする状態であること自体が「申し訳ない」ことであり、高齢の方々も地域でも家族の中でも、肩身の狭い思いをしているのだと感じさせられました。そして、その地域は高齢者の自殺が非常に多い地域でもありました。効率を高め、利益を追求していくことは当然の流れですが、その流れが何らかの犠牲を必要とするものであるなら、それは弱い部分に求められることが多いように思います。

医療も効率重視、利益追求の大きな流れから逃れることはできそうにない雰囲気ではありますが、この領域が利益や効率の原則だけに従うのではない、寛容さも備えたある種の聖域であり続けられることを願っています。もしかするとそれは経済効率だけでは語れない領域（と勝手に思っている？）に身を置く者のわがままなのかもしれませんが・・・。

診療科の紹介【脳神経外科】

脳神経外科は1972年に開設され、33年目を迎えます。昨年の独立法人化にあたり科として掲げた目標は、救急医療を含めた地域医療のさらなる充実と、高度先進医療の推進の2点でした。現状では最少人員での活動ではありますが、院内多方面の部署の御協力により、外科治療が必要な救急疾患の依頼は100%の収容を達成しています。そして平成16年度の雑誌社の調査による臨床成績評価は、全国7600施設中、脳卒中部門で全国第6位、脳腫瘍部門で全国27位の評価を得ています（「全国病院実力度ランキング」平成17年8月刊・宝島社）。津軽地域の他院脳外科施設の閉鎖に伴い、今後当院が当地域での唯一の脳外科施設になることから、当初の目標の継続が科の責務であると考えています。

各疾患分野別の現状と課題としては
■脳卒中：神経内視鏡や血管内手術の併用による治療成績のさらなる向上、
■頭蓋内腫瘍：悪性脳腫瘍に対する独自の集学的治療法の開発、そしてもし機器（ナビゲーションシステム）の購入が大学当局より認可されたなら、これを用いた深部・頭蓋底腫瘍への独自の手術アプローチの開発、
■機能的脳神経外科：パーキンソン病などの不随意運動に対する外科治療の着手、
■小児脳神経外科：県内症例の集約を視野に置いた専門医の育成、などです。

診療科としての現在の重要な課題は2点あります。1つは脳神経外科医の増員ですが、これは来年度にはスタッフの充足が果たせることとなり問題は解消しました。もう1つは病棟編成の問題です。常時オーバーベットの状況



と併せ脳外科病床が多くの病棟にまたがり（5つ！の病棟に病床を間借りしていることもあります）リスクマネジメントをはじめ多くの面で支障を来し、患者側からの苦情も後を絶ちません。「単一フロアでの患者管理」が脳神経外科の長年の悲願であり、この実現により全国一の脳卒中診療施設になることも可能であると信じています。

神経内科診療開始

附属病院に神経内科が新たに開設され、6月1日から診療が開始されました。スタッフは神経統御部門の2名（助教授1、助手1）と第三内科から移籍した5名（講師1、助手1、医員3）の計7名です。外来施設は脳外科のご協力を得て脳外科外来を改造し、二科共同利用として整備されました。結果、脳外科の先生方にご不便をおかけすることになり、一同やや恐縮気味であります。

欧米では神経内科はニューロロジー（神経科）といわれ、内科とは別に発展してきました。内科の先生方が扱わない特殊な神経難病を沢山扱うためです。一方、脳卒中を循環器内科と共同で管理したり、整形外科と協力して脊髄や末梢神経疾患を扱ったり、耳鼻科や眼科と連絡をとり合っただけで視力障害の検査治療をするなど、神経内科はほぼ全科の医師と連携して働くことが多い部門です。ですから、神経専門医は脳神経の専門家であると同時に、臨床全科の神経現象に通じた“総合神経医”であることが要求されます。私共は私共に用意された定床8床をフル稼働し、高い目標をもって充実した

サービスを提供する決意で業務を開始しました。

開設1ヶ月間の新患者数は60名余、紹介率は100%、総患者数は約600名でした。病床稼働率も100%超で、この小文を執筆中の7月27日現在の入院数は定床8を越える10床、うち半数は意識障害や呼吸麻痺を有する重症者です。ただ、ベッド不足で搬入を断らざるを得ず、他院で悪化・死亡する脳炎や神経難病患者が発生するなど、北奥羽地区の中核施設として早くも苦慮すべき事態に遭遇しています。神経疾患の救急には脳炎、髄膜炎、脳卒中など一刻を争う疾患が多いのです。

最近では神経疾患の治療が飛躍的に進歩しました。そこで、電気生理診断を駆使して治療可能患者をより分けたり、新たな治療法を開発することも我々の重要な任務です。初期段階からの新薬開発も沢山人手がけています。この紙面をお借りして、神経疾患は治らないという俗説は過去の迷信であることを力説したいと思います。

関係者の皆様のご支援をよろしくお願い致します。

(文責：総医長 馬場正之)



附属病院を背景にスタッフ一同。

＝弘前大学＝

全国国立大学病院事務部長会議 「東北・北海道地区」会議を開催

全国国立大学病院事務部長会議「東北・北海道地区」会議が7月14日(木)、弘前大学が当番校となり同大医学部附属病院で開催された。

会議には、北海道、旭川医科、東北、秋田、山形及び弘前の6大学の事務部長、担当課長が参加した。

開催に当たり、弘前大学の棟方病院長の挨拶の後、同大学の西田事務部長の議長により「病院への予算配分について」「診療業務等へのインセンティブについて」「医療機器の更新計画について」及び「医師の超過勤務手当の財源確保について」の4項目をテーマに各大学から状況



報告を行うとともに活発な議論が交された。

会議後行われた懇親会では、和やかな雰囲気のもと有意義な情報交換が行われ、今後に実りあるものとなった。次回当番校は東北大学。

ようこそ！高校生一日看護体験へ

「高校生一日看護体験」は、平成4年に制定した「看護師等人材確保の促進に関する法律」に基づき、実施され高校生に看護体験を通し、看護について学ぶ機会を提供することを目的としています。

7月26日の朝、26名の高校生の少し緊張気味の元気な笑顔が揃いました。オリエンテーションが終わり、ユニホームに着替える時のにぎやかさは大変なものでした。そして着替えの後、鏡の前でユニホーム姿を映している高校生は、さっきまでの制服姿から一変し、少し大人びた表情を見せていました。

病棟では、患者様からの歓迎や励まし、感謝の言葉を頂きながら、驚いたりうれしかったりと日ごろ経験したことのない感情が彼女たちの中

に芽生えたようです。

患者様のケアを行うなかで、看護師の気配りや、すばやい行動などに素直に感動し、感想文には、「絶対看護師になる」「相手の立場になって物事を考えることの大切さを学んだ」「看護師は、やりがいのある誇りの持てる仕事」といった文章が並んでいました。

毎年この行事を行うたびに、読んだり聞いたりするだけではなく、体験することで感じた思いや感動が、いかに新鮮で重要かということを実感します。そして、この元気な高校生が何年後か、同じ仲間として看護の道を歩いていると考えるだけであったかき気持ちになりました。

(看護部)



七夕のねがい

1病棟3階 成田牧子

7月7日七夕の夜は、天の川を隔てて輝く彦星と織り姫が一年に一度だけ逢うことを許された夜です。遠く中国から伝わった「七夕祭り」は、なつ祭りの総称としていろいろな形になって日本中に根付いています。その中で、笹の葉に願いを託す形は滞ること無く今に続いています。

七夕には毎年有志の方から小児科病棟に笹が届けられます。そして、その1週間位前から保育士や院内学級の小学校の先生が中心になって七夕飾りの準備が始まります。今年は保育士のアイデアでそれぞれの子どもたちの似顔絵つき短冊が作られました。子供たちはもちろん、付き添っている家族や兄弟、祖父母などの短冊も飾られました。短冊に書かれた願いはどれも「病気が早く治りますように」「早く家に帰りたい」「家族皆で暮らしたい」など、短い言葉に大きな思いを託していました。ご



く日常的なことが果たせないことに胸が痛みます。こんなみんなの願いが一日も早く叶いますようにと、私たちスタッフの願いも加えて、笹が大きくしなってしまうほど立派な飾りができました。そして、強力化学療法室の面会用廊下と病棟の入り口、プレイルーム、乳児室前の廊下にと、子どもたちと一緒に飾りました。

輝く夜空にささげられた短冊の願い事は3年の間に必ず叶うと言われている。みんなの願いが一日も早く叶いますように。

附属病院ホームページの更新について

弘前大学医学部附属病院では「患者本位の医療の促進」を目標に掲げ、患者に分かりやすい診療科とするため、平成17年4月から内科系及び外科系の診療科名を変更しました。

また、神経内科を設置し、診療を6月から開始しました。そこで、最新の情報を患者さまや一般市民に提供するためホームページを更新しま

したのでお知らせします。

更新ページは、診療科名が変更になった診療科が掲載されている部分(配置図等)のほか、下記のページについても更新しております。

何かお気づきの点または変更箇所等がありましたら病院総務課総務グループ広報企画担当までご連絡下さい。

更新ページ	
<ul style="list-style-type: none"> 看護相談・医療相談について 診療料金などについて 弘大病院の指定・承認など 診療科の紹介 初めて受診される方受診はわかり 自動再来受付機 受診される前のお願 診療日と受付時間について 各診療科の外来診療日 各診療科の専門外来 初めて診察を受けるには(手続き・順序) 	<ul style="list-style-type: none"> 初診の申込み(初診申込用紙) ①番窓口(初診受付) 外来診察室の場所 ①番窓口(初診受付)で受け取るもの ②・③番窓口(会計窓口) 院外処方せんファックスコーナー 薬剤窓口 再診を受けるには(手続きなど) 診断書・証明書等の書類について 入院の準備・手続き 各診療科の入院病室の配置

弘前ねぶたまつり

津軽地方の伝統行事である「弘前ねぶたまつり」が8月1日から7日間行われ、弘前大学のねぶたま大学と地域住民との交流を図ることを目的として、1日、3日、5日の3日間参加し、昭和39年に初参加以来、連続42年の出陣を果たしました。

開幕初日は、運行直前の雨も上がり、太鼓と笛の音を響き渡らせながら土手町を練り歩き、本学のねぶたま沿道の観客から大きな喝采を受けていました。

出陣した3日には、医学部附属病院構内において、小児科に入院中の子供達を先頭に、病棟医師・看護師及び事務職員等による「小ねぶた」が運行され、子供たちは囃子に合わせて、「ヤーヤドー」の掛け声を響かせ、夏の夜のひとときを楽しん



でいました。

今年の弘前ねぶたままつり期間中は、雨天中止が1日もなく、本学のねぶた出陣に多数の教職員、留学生及び近隣町会の子供達等の参加を得て、子供も大人も一体となって弘前市内を練り歩き、津軽の夏祭りを盛り上げました。

(総務課)

院内コンサート

7月11日『夏を歌う』

患者サービスの一環として実施している恒例の院内コンサートが、平成17年度第2回目として7月11日(月)午後6時45分から附属病院外来待合ホールで開催されました。

今回も第1回目同様、東奥義塾教諭「熊木晟二先生」の【Bass】、東北女子短期大学講師「熊木美紀子先生」の【Piano】伴奏の両名をお迎えして、『夏を歌う』と題して開催されました。

プログラムは、「我は海の子」他8曲で、6曲目には「幸せなら手をたたこう」を会場に集まった患者様たちと共に歌い、和やかな雰囲気会場は盛り上がりました。

最後には、アンコールに代えて



「別れのともしび」でコンサートが無事終了しました。

また、今回は近年にない約130名ほどの患者様たちが集まり、熊木先生のジョークを交えたトークと力強い響きのある【Bass】を堪能した40分間でありました。

【編集後記】

津軽の風物詩「弘前ねぶた」を皮切りに始まった東北の夏祭りも過ぎ去った。今年の8月は、夏らしい暑い日々が続いたが、今、リングの実も大きくなり、季節は急速に秋に向かっていく。

衆議院議員総選挙。「南塘だより」がお手元に届く頃には結果が出ている。日本はどのような方向に向かって進んで行くのだろうか。

改革一点張りの日本で、大学も構造改革、教育改革で崖っぷちにいる。利潤追求を目的に経営され

る組織が求められている。その最前線にいるのが大学附属病院だ。社会が求めるものとは、結局は、産業界が求めるものなのか。大学附属病院も企業的利益で判断されようとしている。

今、良識の物差しが揺らいでいる。真実の追究、蓄積そして普及が大学の使命ではなかっただろうか。とはいえ、競争に生き残り、今後さらに発展するには、時代の流れに逆らえない。漫然としておれない。

(広報委員 Y. S)